2010年代以降の坂元裕二脚本作品における女性像

橋本侑佳

地域キュレーションコース

映像文化

序論

本研究では、脚本家・坂元裕二の2010年以降の作品における女性像を分析し、その特徴や共通性を明らかにした。2010年以降の作品を取り上げたのは、2010年代に坂元の作家性が確立されたと考えられ(参考1)、また、同時期に映像作品全般で女性の描き方に変化が起こり、フェミニズムの要素を含んだ作品が多くみられるようになったためである(参考2)。

第1章 『居場所』を模索する女性たち

第1章では、『Mother』、『Woman』、『問題のあるレストラン』に登場する女性の「居場所」について考察した。これらの作品では、女性たちが自分の抱える問題に向き合い、「居場所」を模索する。女性たちが、従姉の家や、職場の女性たちのシェアハウスなど、家族から離れたところに自分の「居場所」を見出していることから、坂元が、人と人との関係性において、家族や血縁といった家父長制的な縦のつながりよりも、友情や恋愛といった横のつながり(参考3)を重視していることは明らかである。

第2章 恋愛・結婚・離婚と、その先の関係性

第2章では、『最高の離婚』、『カルテット』、『スイッチ』、『大豆田とわ子と三人の元夫』における男女の関係性を考察した。第1節では、結婚や離婚の描写を分析した。結婚が人生のゴールとして描かれていないことから、坂元は「結婚=幸せ」、「離婚=不幸」といった固定観念にとらわれず、結婚や離婚から浮かび上がる人物の生き方に焦点を当てているといえる。第2節では、作中で描かれる「離れたくても、離れられない」関係性について考察した。互いの生き方を尊重することの大切さが示されたこの関係性は、恋愛や結婚などの概念を超えた、新しい関係性であるともいえる。坂元は、これまでに描かれてきた横のつながりを発展させ、既存の言葉では説明できないものへとアップデートし続けているのだ。

第3章 『女としての幸せ』を選ばない主人公

第3章では、『スイッチ』と『大豆田とわ子と三人の元夫』に登場する女性たちの人生にかかわる選択や、ポストフェミニストとの関連を分析した。「結婚=幸せ」を否定するポストフェミニストの要素を持つヒロインたちは、孤独を克服する場面では他人の力を借りている(参考4)。対して、坂元の作品の女性たちは、自分を主体として孤独を乗り越えている。坂元は、これまでのドラマで描かれてきた、女性が結婚して幸せになる結末や、仕事で成功するといった結末とは違ったものを提示している。

そして、それらの女性たちを通して、女性に限らず、すべての人 に自分のことを尊重し、人と人とのつながりを大切にする生き 方があることを示しているのだ。

結論

坂元の2010年以降の作品には、「結婚=幸せ」と定義せず、自分を主体として自分らしい生き方を見つける女性たちが登場し、既存の女性の描かれ方にとらわれない坂元の独自性が示されている。2010年代以降の坂元の作品における女性像は、これまでのテレビドラマにおける従来的な女性像とは一線を画すものであり、自分にとっての幸せを尊重する女性の生き方や、女性の人生における、愛情や思いやりのある人と人との関係性を示しているのだ。

[主要参考文献、URL]

参考1)北村匡平/「坂元裕二ドラマ「Woman」論 満島ひかりの手の演技」、『ユリイカ』第53巻第2号/青土社/2021/p126

参考2) 西森路代/「フェミニズムの視点を取り入れた日本のドラマの変遷一二〇一四年から現在まで」、『「テレビは見ない」というけれど エンタメコンテンツをフェミニズム・ジェンダーから読む』/青弓社/2021/p118-119

参考3)岩男壽美子/「Iテレビドラマの移り変わり」、『テレビドラマのメッセージ 社会心理学的分析』/勁草書房/2000/p20

参考4)河野真太郎/「記録的大ヒット…Netflix『クイーンズ・ギャンビット』が『アナ雪』の"先"を行く理由」/https://bunshun.jp/articles/-/42006

岡本かの子の小説作品にみる動物

柴崎達裕

芸術文化キュレーションコース 文学研究

序論 研究目的

岡本かの子は大正、昭和前期に活躍した作家である。本論 文の目的は、かの子の小説作品のなかの「動物」に着目し、そ こに何を読み取ることができるのかを明らかにすること、また、 吉本隆明が述べる、かの子文学に含まれているという「生命の 糸」(引用1)の具体化を試みることの二点である。

第一章 肯定的姿勢

第一節では、かの子の歌・随筆から、かの子の「動物」に対する肯定的姿勢を確認した。かの子の「動物」に対する愛情は、身近な「動物」だけに注がれるのではなく、随筆「初秋の母の感壞」にみられるように、「生物の全部」に向けられていることが分かった。第二節では作品「家靈」、「鮨」を取り上げ、作品に描かれる「どぜう汁」、「鮨」に着目することで、「食」というかたちになった「動物」を考察した。それら「どぜう汁」、「鮨」は、人物の"いのちのコミュニケーション"を仲介する重要な役割を担っていることが明らかになった。

第二章 魚

第一節では、かの子についての研究動向を整理することで、 最近ではかの子の個性的な作風を「女性の人生における多様 な選択肢を考えさせ得る」(引用2)ものとして評価する傾向が あることが分かった。第二節では、作品「晩春」、「金魚撩亂」の 二つの作品を、「性」という視点から考察した。それらの作品の なかで、主人公となる人物は、精神の深層に潜む原動力として の「性」について葛藤している様子で描かれており、そして「魚」 にその解消をみていることが明らかとなった。第三節では、「金 魚撩亂」の結末部に焦点を当てた。一部の先行研究において この作品の結末は、「家父長制崩壊のアレゴリー」としての解 釈が為されている。だが、一見「女性」の「解放」として読める部 分も、注意深くみると「男性の封建的な男性性のからの解放」 としても解釈することができる。このような解釈も可能なことか ら、かの子は性別によらず、一つの「いのち」に対して「解放」の 示唆を与えていると推察することができるのである。

第三章 「いのち」の関わり合い 一「蝙蝠」を読む一

第三章Iでは、かの子の小説作品のなかの「動物」と「人間」 の境界について、宮沢賢治の作品と比較しながら考察した。 他の生き物の「いのち」を食べることを、宮沢賢治は「醜い業」 と捉えるのに対して、かの子は「コミュニケーションの一環」と して捉えており、かの子のなかで「動物」と「人間」の距離は近 く、また親和性の高いものであることが明らかとなった。その点を踏まえ、IIでは、作品「蝙蝠」を読み解いた。作品のなかで「動物」は、「人間」の精神に影響を与える存在であり、またその影響は一時的なものではなく、物語終盤まで持続していることから、いわば"人間が蝙蝠に飼われている"とも言うことができる。このような「動物」が「人間」の精神に干渉するという構造に、「動物」と「人間」の境界の非具体性が現れているのである。

第四章「動物」が現れない作品の「動物的」読み

第四章Iでは、「動物」が表れない作品「快走」に焦点を当て、「動物」が現れる作品との共通点をみつけることで、「動物性」を発見することを試みた。「快走」のなかで、「動物性」は、主人公が「走る」という行為を通して没入する「世界」や、主人公の衝動的な精神の「変化」、あるいは主人公のその変化に呼応し、他の人物の内面にも変化が生じるというその「連鎖性」から読み取ることができる。このように「動物」が現れない作品のなかにも「動物性」が潜んでいることから、「動物」が現れる作品の特徴である「いのち」の「抑圧」と「解放」は、かの子作品全体の主題ではないかと推察された。

結論

これまでの章を踏まえると、岡本かの子の小説作品のなかの「動物」は、人物の「解放」の象徴であると考えることができ

る。そして人物を「抑圧」している原因の根底にあるものは、精神の深層にある「性」である。つまり、吉本が「生命の糸」という 漠然とした言葉を用いたのは、岡本文学が既存の言葉では語り切れない、底知れぬ原動力である「性」を内包しているしるしであるのだ。したがって、かの子作品の主題とした「抑圧」と「解放」を加味すると、吉本の言う「生命の糸」とは、精神の深層にある「性」の「解放」の現れであると考えられるのである。

岡本かの子が「動物」を「解放」の象徴として描いた背景には、やはりかの子が「動物」に対して肯定的な姿勢をもっていたからであると推察できる。そして、そうした「性」や「いのち」の「解放」という普遍的テーマを内包しているからこそ、岡本文学は現代でも盛んに再評価が試みられているのだ。

「参考文献、引用文献、URL]

引用1)吉本隆明/「岡本かの子」、『吉本隆明の183の講演』/1989/https://www.1101.com/yoshimoto_voice/speech/text-a117.html 〈2019/10/26時点〉引用2)小松史生子/「岡本かの子―一恍惚の三昧境で性を
おきて、『たばれいぶっとが、 たれれ、美芸『ならてききょうに

超える」、『女学生とジェンダー 女性教養誌『むらさき』を鏡として』/今井久代・中野貴文・和田博文編/笠間書院/2019/p360

現代を生きるゾンビたち

2010年代ゾンビ映画研究

林美伶

芸術文化キュレーションコース

映像文化

はじめに 研究背景と本論文の目的

ゾンビ映画と呼ばれる作品群がある。世界初のゾンビ映画と言われる作品の公開から現在に至るまでの約90年もの間、ゾンビ映画はその特徴を受け継ぎながら様々な形で制作され続けている。公開本数が劇的に増加した2000年代からの「ゾンビ映画ブーム」は、2010年代においても衰えることはなく、数々の話題作やヒット作を生んだ。そして、2010年代に公開された作品には、ヒット作であるか否かに関わらず、これまでのゾンビ映画作品とは異なる特徴が見られる。

本論文の目的は、2010年代ゾンビ映画ブームにおける新たな動向と変化がどのようなものであるのかを同時代的に明らかにすることである。そのため本論文では、ジャンルにおいての新たな視点や表現等が見られる2010年代の作品を約20点取り上げ、ゾンビ映画の歴史やその典型的な特徴と照らし合わせながら、変化が捉えられる点について、「人間ドラマ」、「ロマンス」、「笑い」、「進化」という4つの観点から考察を行った。

第1章 ゾンビとは何か

ゾンビ映画とは、「吸血鬼やミイラ男などのモンスターに分類できない、何らかの理由で蘇った実態を伴う死者、あるいは一般的なゾンビのイメージに近い催眠・錯乱状態にある人々が登場する映画」(引用1)として広義に捉えられる。世界初と言われるゾンビ映画は、集中的にホラー映画が製作された1930年代初頭に生まれた。ゾンビは、「フランケンシュタインの怪物」や「ドラキュラ」に次ぐ新たな怪物として映画界に登場した。つまり、ゾンビ映画はホラー映画と深い関係を持って制作されてきたのである。そして、ゾンビ映画におけるゾンビは、1930年代から2000年代にかけて、「人間に使役される他律的なゾンビ」、「自立的に人間を襲い増殖するゾンビ」、「走って人間に襲い掛かるさらに凶暴性を増したゾンビ」というような変遷を経ている(参考1)。時代と共に変化してきたゾンビ映画はこの後どのように展開していくのだろうか。第2章で詳しく分析した。

第2章 2010年代ゾンビ映画の進化

第1節では、「人間ドラマを描くこと」を主軸にした2010年 代ゾンビ映画を取り上げた。そのような作品は、人物の心情 を繊細に描くことで物語世界へのさらなる没入を可能にし、 また、見る者の心身の限界を超えた疑似体験を可能にして いる。さらに、ゾンビ側の人物を主人公に据え、ドラマチック な物語を描くことで人間の敵としてのこれまでのゾンビに新 たな視点と概念を示している。ゾンビは、人間を危機的状況 に追い込み、その本質を顕在化させる役割を担っている。

第2節では、ゾンビ・ロマンスというゾンビ映画の新基軸について分析した結果、そのような作品に登場するゾンビには、ロマンス映画のヒーローたる資質が認められた。また、ゾンビと人間の恋愛物語は、圧倒的な「他者」を受け入れるという点において、異文化理解や差別問題への強いメッセージを含むことが可能である。

第3節では、2010年代ゾンビ映画を「笑い」という観点から考察した。この年代の作品には、笑いの対象としての愚鈍なゾンビの表現を引き継ぎながら、凶暴的な側面をも笑いに変える演出が見られた。作中に見られるパロディやオマージュは皮肉や風刺を含み、ウィットやユーモアによる笑いの演出は、他作品によって形成された固定概念を覆すと共に、他作品への切り返しの手段として機能している。ゾンビ映画における笑いは、死や恐怖など深刻な状況を描くゾンビ映画の娯楽性を高める役割を持つ一方で、映画として観る者に伝えるベきメッセージやテーマを内包している。

第4節では、2010年代ゾンビ映画を「進化」という観点から考察し、ゾンビ映画が描くゾンビと人間の関係性に変化が見られることを明らかにした。本節で取り上げた作品には、人間という制限から解放された存在であるという、ゾンビへの肯定的な視点が見られ、このような視点は、2010年代ゾンビ映画の一つの特徴として挙げられる。

おわりに

2010年代ゾンビ映画においては、思考能力や感情を持った「個」としてのゾンビの表現が見られ、本論文ではこれを"インディビジュアルゾンビ"と呼ぶことにした。主人公として感情移入の対象ともされ得る"インディビジュアルゾンビ"は、ゾンビ映画というジャンルにおいて新たな物語展開を可能にする。さらに、2010年代ゾンビ映画は、人間の生きる姿に焦点を当てた物語を描くことで、人間という存在を問う側面も持つ。これらの作品は、表面的な残酷性以上に読み取るべき主張やテーマを含み、映画作品として多様な価値を持っているのである。総じて、本論で考察した作品は、ゾンビ映画、あるいはゾンビというものに新たな概念や視点を与え、ゾンビ映画というジャンルの多様性を高めている。よって、2010年代ゾンビ映画は、ジャンルのさらなる進化を示すものであると言える。

「参考文献、引用文献]

引用1)伊東美和/『ゾンビ映画大辞典』/洋泉社/2003/p8 参考1)福田安佐子/「ゾンビ映画史再考」、『人間・環境学』第 25巻/京都大学大学院人間・環境学研究科/2016/p55-6